

名古屋大学における外国人留学生受入れの歴史に関する一考察

—受け入れ数の推移と外国人留学生後援活動—

片岡弘勝

はじめに — 課題設定 —

一九八〇年代後半以降、日本社会においても企業の資本と製品・部品そして労働力の国境を越えた大量移動が急増した。なかでも国境を越えた人の移動の急増は、社会的あるいは文化的に日本社会のあり方を刺激する大きな要因になってきている。大学もその例外ではなく、日本社会の「国際化」の進展と同時期に外国人留学生が増し、一九九一年五月時点で大学学部一七、五四四人、大学院一三、二二六人、計三〇、七七〇人となっているが、名古屋大学においても五一一人となり、もはや外国人留学生は大学の研究・教育上に大きな位置を占めるようになってきているといえる。

また、このように外国人留学生が急増するにつれて、日本語教育、住居、学位取得や奨学金等に関する環境条件の整備が不十分である等、外国人留学生の生活や研究・教育をめぐって様々な困難が存在することがこれまで指摘されてきた。例えば、三〇余年もの間、愛知に学ぶ外国人留学生を支援してきた牧島久雄氏（財団法人国際留学生会館学生相談員、元名古屋大学学生部長）は、当面する留学生受け入れの課題として、①外国人に対する日本人の（差別）意識を改めること、②留学生の宿舍の整備、③日本語教育の充実、大学生活への適応相談体制の充実、学位授与等大学の受け入れ制度の整備、④奨学金制度の充実、⑤以上の四点の改善策を進める上で、大学以外にも地域社会が留学生をめぐる諸問題に関心を寄せ、各立場から尽力している団体等が参加して都道府県別に協議体組織を結成する等に努めること、という五点を指摘している。

以上の五つの課題は、個人の意識・行動、大学の取りくみや地域・自治体による協力のしくみ・制度の各側面に関わる諸課題であるが、それらのうち、大学の組織的対応によって解決可能な課題については、名古屋大学はこれらを解決し、外国人留学生の生活・研究・教育上の便宜をはかる方向で取り組んできている。具体的には、日本語研修コース（一九七九年）および日本語・日本文化研修コース（一九八一年）の開設（言語文化部）、大学院工学研究科土木工学専攻の特別コースの設置（東南アジアの留学生を対象に英語による授業を行う、修士課程一九八七年、博士課程一九九〇年）、大学院文学研究科の日本語文化専攻設置（一九八八年）、大学院理学研究科大気水圏科学専攻の特別コース（一九九〇年開設、翌年一月留学生受け入れ開始）、国際交流会館（インターナショナルレジデンス）の設置（一九八二年）、外国人留学生相談室の設置（一九七五年）外国人留学生相談室の設置（一九七五年）および懇親パーティー、見学旅行、工場見学、茶華道講習会の実施等が取りくまれてきた。

しかし、このような取りくみにもかかわらず、依然として解決・改善の最も困難な問題の一つは、生活慣習や文化の異なることから生じる外国人に対する差別の問題である。受け入れる側の日本人が、特定の出身国・地域からの留学生を差別することなく、各々の生活・文化上の価値観について理解を深め、相互に認め合い、対等の立場で交流することが依然として困難であるため、外国人留学生がそのことが原因で悩むというケースが多い。例えば、国際交流研究所が一九九一年に行った「留学生・就学生の意識調査 一、五〇九人のアンケート集計結果」によれば、「日本で一番嫌だったこと・不愉快だったこと」（回答・一、一〇三人。約二割が複数回答。四〇六人は無回答。）について、「外国人であるという理由で差別された」が六〇七人（五五・〇％）であり、具体的には「アルバイトを断られた」、「部屋探しの時、断られた」、「人種差別意識を持っている」、「特に欧米人とアジア人を差別する」、「バイト先で時給で差別された」等となっている。また、「留学で一番不満に思っていること、困っていること」（回答・一、一九二人。約二割が複数回答。三二七人は無回答。）が「奨学金がもらえない」が三三九人（二八・四％）、「アルバイトをしなければならぬ」が一九七人（一六・五％）に次いで「日本人と友達になれない」が一八一一人（一五・二％）となっており、「親しい日本の友達は？」に対する回答（回答・一二八八人。二二一人は無回答。）は、「いる」が五六九人（四四・二％）、「いない」が七一九人（五五・八％）と半数以上日本の友人ができないという結果が出ている。そこには、アジア地域をはじめ特定の国・地域出身の留学生に対する日本人の差別的な意識・行動が依然として存在することがうかがわれる。大学が真の意味でどれほど国際社会に開かれているかという度合いは、この問題の克服如何に大きくかかっていると思われる。

以上のような大学の国際交流、とくに外国人留学生受け入れに関する問題意識と視点をもちつつ、本稿では名古屋大学における外国人留学生受入れと、その性格とくに名古屋大学関係者による努力の積み重ねについて歴史

的考察を加えることにする。

まず、名古屋大学において一九五九年以降、何人の外国人留学生を受入れてきたかという数量的変化をおさえ、それがどのような構造的特質をもっているかについて考察し、その上でさらに、外国人留学生を支援する活動として留学生後援会に注目し、その発足と歩みの特質について考察を加えることにする。

留学生後援会に注目する理由は、愛知における留学生後援会が、前述したような外国人留学生と対等の立場で相互交流を行いつつ支援をするという経験を着実に積み重ねてきたからである。ここでは、対等の立場での国際交流を行いながらの支援活動がどのような形で行われてきたかという点に焦点をあてたい。

一 名古屋大学が受け入れた外国人留学生数の推移とその特徴

1 国費・私費別および学部・大学院別にみた名古屋大学における外国人留学生受け入れ数の特徴

新制名古屋大学における外国人留学生の受け入れに関する規程は、一九八六年度までは特定の文書規程は存在せず、文部省のとりきめた「国費外国人留学生実施要領」（一九五四年三月三十一日文部大臣裁定）および私費留学生選抜制度（私費外国人留学生統一試験等）に基づいて受け入れが行われてきた。しかし、一九八六年四月一日の名古屋大学通則の全面改正のさい、次のような規定が同通則に入れられた。

「第十章 外国人留学生」

「第六六条 外国人で大学において教育を受ける目的をもって入国し、本学に入学を志願する者があるときは、外国人留学生として入学を許可することができる。」

二 外国人留学生は、学生定員の枠外とすることができる。

三 前二項に規定するもののほか、外国人留学生の入学その他に関し必要な事項は、別に定める。」

名古屋大学は、それまで学内における特定の文書規定をもたず、政府の定めた受け入れ制度に基づき外国人留学生を受け入れてきたが、一九八〇年代に入り外国人留学生受け入れ数が増加の一途をたどったため、大学通則に受け入れ規定が設けられることになったのである。その外国人留学生受け入れ数の推移がどのようなものであったかについて次にみていくことにする。

一九五八年に「東南アジア諸国への経済援助、技術援助の一環として、あるいは経済援助に先がける人づくりの一つの協力策」を目的にして「国費外国人留学生招致制度」が日本政府によって創設された。この制度の創設を受け、名古屋大学が国費留学生の受け入れを開始したのが一九五九年であった。まず、その一九五九年以降に名古屋大学が受け入れた外国人留学生の総数の推移からみることにする。それを表にしたものが表1であり、グラフで示したものが図1である。

一九五九年に二人、その後私費留学生受け入れ数も増え、一九六六年十六人、一九七五年四三人と徐々に増えてきたが、一九八〇年一〇八人、一九八五年二四八人、一九九〇年五二二人というように一九八〇年代以降の急増が著しい。名古屋大学における外国人留学生受け入れの歴史を数量的視点から時期区分するならば、一九五九年から一九七九年までのいわば漸次増同期と一九八〇年以降現在までの急増期とに大きく分けることができる。一九八〇年頃が数量的視点からみても大きな転換期であるということが出来る。

次に、外国人留学生受け入れ数の推移を部局別にみることにする。これを示したものが表2である。

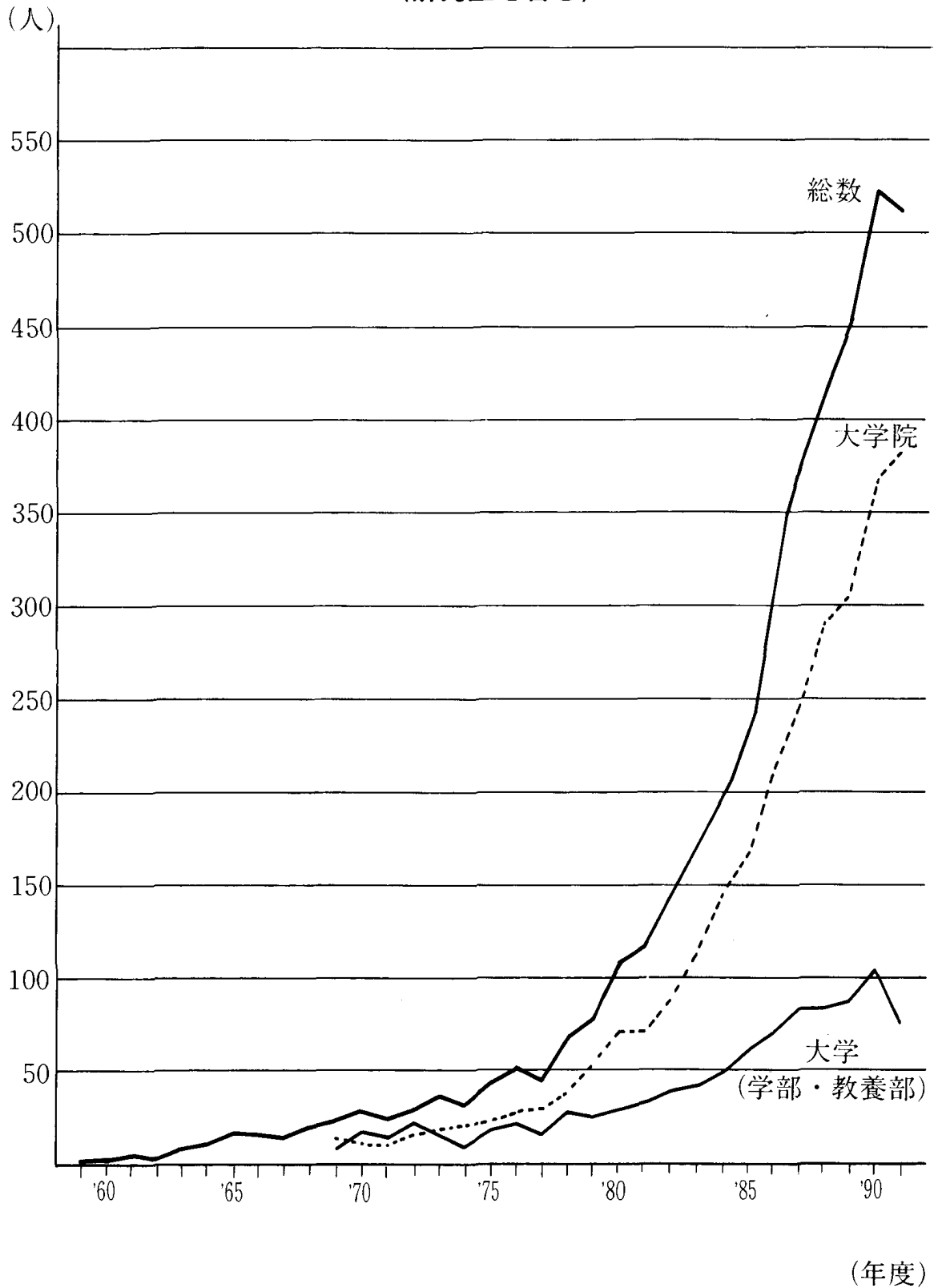
まず指摘できることは、工学部、農学部および医学部における受け入れ数が文学部、経済学部、教育学部、法

表1. 名古屋大学が受け入れた外国人留学生数の推移
(1959年以降) (研究生を含む)

区分 年度	在 籍 者 数			計
	国 費	外国政府	私 費	
'59				2
'60				3
'61				5
'62				3
'63				9
'64				11
'65				
'66				16
'67				14
'68				20
'69	13		10	23
'70	11		17	28
'71	11		13	24
'72	15		14	29
'73	14		22	36
'74	19		12	31
'75	24		19	43
'76	27		24	51
'77	28		17	45
'78	42		25	67
'78	44		34	78
'80	54		54	108
'81	65		52	117
'82	78		67	145
'83	93	39	42	174
'84	116	35	66	217
'85	134	28	86	248
'86	163	41	120	324
'87	190	40	145	375
'88	191	43	179	413
'89	210	33	207	450
'90	223	28	271	522
'91	209	28	274	511

一九六九年以降については、名古屋大学の学園だより編集委員会（名古屋大学本部学生生活委員会）『学園だより』に掲載・記録された「外国人留学生の異動」あるいは「外国人留学生数調」を基にして、作成した。一九六八年以前については、名古屋大学学生部や各部局教務学生掛の調べ・記録・および愛知留学生会後援会（旧称、愛知国際学友会後援会）の会報に基づき、判明分のみ記載した。

図1. 名古屋大学が受け入れた
外国人留学生数の推移 (1959年以降)
(研究生を含む)



学部といった文科系学部に比べて多いことがあげられる。いまひとつには、言語センター（現、言語文化部）に一九七九年、設置された日本語研修コースに学ぶ外国人留学生が着実に増えていることも注目される。

以上のような名古屋大学における外国人留学生受け入れ数の推移を、日本全国の大学・大学院における外国人留学生受け入れ総数の推移（一九六三年以降）と比較・検討してみることにする。日本全国の大学・大学院における外国人留学生受け入れ総数の推移（一九六三年以降）を示したものが表3および図2である。

表3および図2をみると、先にみた名古屋大学の場合と同様に、若干の例外の年はあるものの、全体的傾向としては一九六〇年代と一九七〇年代の期間に少しずつ増え、一九八〇年代はじめ頃より急増していることがわかる。二一世紀への留学生政策懇談会「二一世紀への留学生政策に関する提言」（一九八三年八月、首相・文相に報告）および文部省内留学生問題調査・研究に関する協力者会議「二一世紀への留学生政策の展開について」（一九八四年六月、文相に報告）では、二一世紀初頭には約十万人の外国人留学生を受け入れるようになることを想定し、そのための受け入れ体制・環境条件の整備等の必要を説いていたが、その後の受け入れ数の増加は、大学・大学院だけでなく高等専門・専修学校を含めれば、当初の想定を上回っている。表3および図2でみた全国の大学・大学院での外国人留学生受け入れ数の増加もこうした流れの中にあるものといつてよい。名古屋大学の場合にも同様のことがいえる。

しかし、名古屋大学における外国人留学生受け入れ数の推移を、全国の大学・大学院における受け入れ数の推移と比較すると、名古屋大学の場合の特質といえる点が二つある。

その一つは、国費留学生と私費留学生の比率についてである。全国の場合も名古屋大学の場合も私費留学生の方が多いが、しかし、その比率は、全国の場合は圧倒的に高い（例えば一九九一年でみると、二五、九八〇人

表 2. 名古屋大学における部局別外国人留学生数の推移

	文		教育		法		経済		理		医		工		農		教養		言文		その他			計	
	学部	院	学部	院	学部	院	学部	院	学部	院	学部	院	学部	院	学部	院	文科	理科	※研修	※研究	※国際	※その他	学部	院	その他
'59年											1		1										1	1	
'60年											1		1		1								1	2	
'61年							1				1		1		1		2						4	1	
'62年											1		1		1								1	2	
'63年		1									2	1	1		1	3								9	
'64年11月						1		1			2	1	4		2								6	5	
'65年											3														
'66年1月	1		1			3	1				3		3		1	3							10	6	
'67年6月	2					1	1				4		3		1	2							11	3	
'68年7月	1					1					3		2	4	2	7							8	12	
'69年11月	0	0	0	0	1	1	0	0	1	2	4	0	0	4	3	7							9	14	
'70年5月	3	0	0	0	1	1	0	0	0	2	11	0	0	3	2	5							17	11	
'71年5月	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	11	0	1	2	1	5							14	10	
'72年5月	0	0	0	0	2	1	2	3	2	4	8	0	1	2	1	6						1	22	16	
'73年5月	0	0	0	0	2	1	2	2	0	4	7	0	5	3	0	9						1	16	19	
'74年6月	0	1	0	0	0	1	0	3	0	2	6	0	4	6	0	8							10	21	
'75年6月	1	1	1	0	0	2	2	3	1	0	5	0	8	8	0	10	0	1					19	23	
'76年6月	1	1	1	0	2	1	0	3	0	2	8	1	8	10	1	10	0	1					22	28	
'77年9月	2	3	0	0	1	1	0	1	0	2	5	0	3	15	3	7	0	2					16	29	
'78年6月	4	1	1	0	1	1	2	2	0	3	6	1	6	19	3	11	0	5					28	38	
'79年6月	2	2	2	0	0	2	1	4	0	4	5	3	8	18	1	20	1	4					25	53	
'80年6月	1	4	1	1	0	2	5	3	0	7	9	2	5	31	1	21	0	7	8	0			29	71	8
'81年6月	2	0	3	1	0	2	1	5	0	8	7	6	6	27	2	22	2	10	13	0			33	71	13
'82年6月	5	0	2	3	0	3	0	8	1	7	8	7	6	35	2	25	15	20	0				39	88	20
'83年5月	2	3	1	4	1	2	3	10	4	8	8	7	7	51	3	28	13	21	0				42	113	21
'84年6月	4	6	2	7	1	4	5	8	2	13	9	6	10	59	1	42	15	23	0				49	145	23
'85年6月	5	6	2	7	3	5	2	12	3	16	11	8	9	61	0	51	13	33	5				61	166	33
'86年5月	1	11	2	7	2	13	2	15	0	23	17	14	14	78	3	51	15	42	13		1	70	212	42	
'87年5月	5	10	5	9	2	16	5	20	3	25	15	20	15	92	4	55	13	45	16				83	247	45
'88年5月	10	19	5	12	4	18	7	26	2	28	14	24	18	109	0	54	9	40	12		2	83	290	40	
'89年5月	6	23	2	10	6	30	11	26	4	23	13	26	23	112	4	55	6	58	11		1	87	305	58	
'90年11月	8	35	4	9	8	35	10	30	3	20	16	29	19	156	13	52	7	52	15		1	104	366	52	
'91年5月	8	37	4	7	6	30	7	32	3	18	8	34	10	154	3	61	15	55	7	9	3	74	382	55	

一九六九年以降については、名古屋大学の学園だより編集委員会（名古屋大学本部学生生活委員会）『学園だより』に掲載・記録された「外国人留学生の異動状況」あるいは「外国人留学生数調」を基にして、作成した。一九六八年以前については、名古屋大学学生部や各部局教務学生掛の調べ・記録・および愛知留学生会後援会（旧称、愛知国際学友会後援会）の会報に基づき、判明分のみを記載した。

表中の※研修とは日本語研修コース；日本語日本文化研修コースを意味し、※国際開発とは国際開発研究科を意味する。

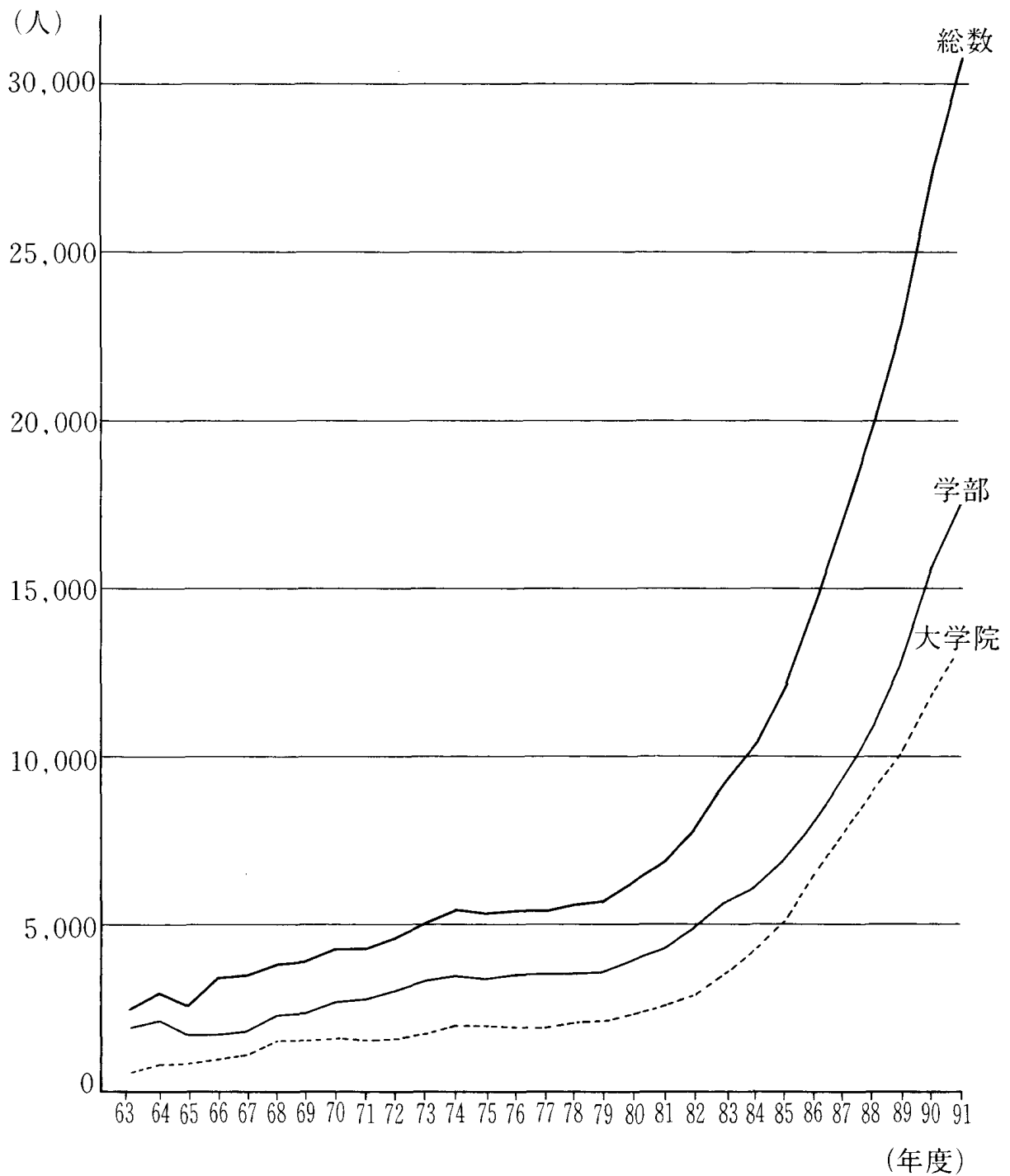
表3. 日本全国の大学・大学院で受けた外国人留学生数の推移

(専攻科・別科・聴講生・選科生・研究生等を含む。)

年度	学 部			大 学 院			※「専攻科・別科」 「選科生・聴講生・研究生等」	計		
	国費	私費	小計	国費	私費	小計		国費	私費	計
1963	555	1361	1916	43	520	563		598	1881	2479
1964	301	1827	2128	54	763	817		355	2590	2945
1965	235	1459	1694	93	743	836		328	2202	2530
1966	236	1466	1702	161	810	971	734	397	2276	3407
1967	233	1549	1782	190	919	1109	578	423	2468	3469
1968	335	1944	2279	265	1257	1522		600	3201	3801
1969	353	1995	2348	255	1272	1527		608	3267	3875
1970	302	2377	2679	284	1298	1582		586	3675	4261
1971	320	2413	2733	302	1226	1528		622	3639	4261
1972	341	2671	3012	320	1240	1560		661	3911	4572
1973	377	2944	3321	397	1313	1710		774	4257	5031
1974	266	3187	3453	666	1296	1962		932	4483	5415
1975	434	2931	3365	612	1342	1954		1046	4273	5319
1976	431	3072	3503	600	1303	1903		1031	4375	5406
1977	457	3074	3531	617	1269	1886		1074	4343	5417
1978	381	3144	3525	691	1363	2054		1072	4507	5579
1979	392	3182	3574	772	1344	2116		1164	4526	5690
1980	435	3489	3924	926	1396	2322		1361	4885	6246
1981	504	3788	4292	1081	1491	2572		1585	5279	6864
1982	584	4330	4914	1194	1698	2892		1778	6028	7806
1983	567	5106	5673	1430	2098	3528		1997	7204	9201
1984	569	5501	6070	1662	2568	4230		2231	8069	10300
1985	531	6370	6901	1847	3236	5083		2378	9606	11984
1986	673	7321	7994	2281	4174	6455		2954	11495	14449
1987	694	8612	9306	2609	5084	7693		3303	13696	16999
1988	899	9905	10804	3023	5846	8869		3922	15751	19673
1989	956	11868	12824	3294	6824	10118		4250	18692	22942
1990	1121	14491	15612	3605	8218	11823		4726	22709	27435
1991	1032	16512	17544	3758	9468	13226		4790	25980	30770

文部省『学校基本調査報告書』各年度より作成。ただし、同報告では、1953年度から1962年度までは、「外国人留学生」と「外国人学生」とが区別されておらず、「外国人学生」のみの数を記してあるので、本表では割愛した。また、1966年度と1967年度の場合に限り「専攻科・別科」「選科生・聴講生・研究生等」の数字が、大学・大学院の区別なく一括に記載されているので、本表においても、これら二年度のみ、※印の欄を設けた。

図2. 日本全国の大学・大学院で受け入れた
外国人留学生数の推移
(専攻科・別科・聴講生・選科生・研究生等を含む)



(文部省『学校基本調査報告書』1963年度～1991年度より作成)

全体三〇、七七〇人の八四・四%)が、名古屋大学の場合は、やや小さくなっている(三〇二人で全体五一一人の五九・一%)。

いま一つには、全国の場合は大学学部での受け入れ数が大学院での受け入れ数よりも多くなっているが、名古屋大学の場合は、これと逆の傾向がみられる。名古屋大学の場合は、表1および図1でみるように、一九七八年頃まで学部での受け入れ数と大学院での受け入れ数とは大差はないが、一九七九年頃より学部での受け入れ数に比べて大学院での受け入れ数が増える度合いが大きくなり、一九八〇代はじめ頃より急増している。一九九〇年から一九九一年にかけて大学院が三六六人から三八二人に増えているにもかかわらず受け入れ総数が五二二人から五一一人に減っているのは、学部が一〇四人から七四人に減っているためである。

この点を部局別にみる(表2)と、工学部については、学部での受け入れ数に比べて大学院での受け入れ数が一九七七年頃より急増し始めた。農学部については、受け入れ数の確定できる一九六九年からすでに大学院での受け入れ数の方が学部よりも多く、その傾向はその後も続いている。また、一九九〇年を除いて、学部に対する大学院の比率が他学部に比べて高い。医学部については、一九五八年から一九八六年までは大学院に比べて学部が多かったが、一九八七年以降は、その関係が逆転し大学院の方が多くなっている。理学部については、一九七五年度以外の年度は、すべて大学院の方が学部よりも多くなっている。文科系学部については、名古屋大学全体における外国人留学生受け入れの傾向と同様に、概ね一九七〇年代末から一九八〇年代はじめにかけて大学院が学部よりも少ないかあるいは同数の年がみられるが、法学部では一九七九年から、経済学部では一九八一年から、教育学部では一九八二年から、文学部は一九八三年から各々大学院の方が学部よりも多くなっている。

2 外国人留学生出身地域・国別にみた名古屋大学における外国人留学生受け入れ数の特徴

次に、外国人留学生受け入れ数の推移とその特徴を、留学生の出身地域・国別の視点から指摘することにする。ただし、ここでは外国人留学生が増える背景としての出身国の事情、あるいは私費の外国人留学生がなぜ留学先として名古屋大学を選択したのか、等に関しては触れることはできない。ただ、結果として名古屋大学が受け入れることになった外国人留学生数の推移をみていくことにする。

その年度別の推移（一九五九年度以降）を示したのが表4である。その第一の特質は、アジア地域出身の留学生が圧倒的に多数であるという点である。一九六六年（一月）に一四人、（全体の八七・五％）、一九七〇年（四月）に二二人、（全体の七八・六％）、一九八〇年（六月）に八六人、（全体の七九・六％）、一九九〇年（十一月）に四三七人、（全体の八三・七％）というように全体に占める割合が非常に大きい。しかし、アジア地域の内部構成をみてみると一つの変化がみられる。すなわち、一九五九年から一九七九年までのいわば漸次増加期には大韓民国、台湾、タイ、インドネシア、パキスタン等の国々から構成されていたが、一九七九年から中国出身の留学生数はその受け入れが始まって以来、急増した。一九七九年には四人（全体の五・一％）、一九八五年に七一人、（全体の二八・六％）、一九九〇年に二二一人、（全体の四二・三％）と実数および全体に占める割合ともに急増し、この時期における、名古屋大学で受け入れた外国人留学生総数の急増を生む第一要因となっていることがわかる。中国は、一九七〇年代末より「改革と開放」政策をかけた、その一環としてアメリカ合衆国や、いわゆる「西側」のヨーロッパ諸国や日本に多くの留学生を派遣することを始めた。名古屋大学がその中国出身の留学生を受け入れ始めたのが、一九七九年度であった。

一九八〇年以降現在までの急増期には大韓民国、台湾両国出身の留学生数は確かに増えているが、一九八〇

年度	学部		59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91								
	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理	文	理					
アメリカ合衆国														1		1			2	1	2	3	3	3	1	1	1	1	3	3	1	3	3	1	1	1	6						
カナダ																			1									1	1														
エチオピア																															1	1					2						
アラブ連合共和国 1991年にエジプト-アラブ共和国に改称											1	2	2	2	3	3	2	2	2	2	1	2	2	2	1	3	1	2	2	3	3	1	2	1	1		2	3	3				
スーダン																					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			1	1	1						
リビア																																			1	1		1					
ケニア																	1	1																									
ザイール																					1	1																1	2				
ガーナ																					1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1	1			
チュニジア																																							1	1			
ギニア																																											
モロッコ																												1															
タンザニア																																							1				
ザンビア																																							1				
ナイジェリア																																							1	1	1		
リベリア																																							1				
オーストリア																																							1				
ユーゴスラビア																																							1				
イギリス																					1	2	1	1	1				1	2	1	1	1	3	1	1	1	2	2	1	1		
フランス																					1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
ドイツ																				1																				4	2	2	1
イタリア																																								2	1	1	
ギリシャ																					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
デンマーク																																								1	1		
ポーランド																																								1	1		
オランダ																																								1	1		
ノルウェー																																								1	1		
チェコスロバキア																																								1	1		
ルーマニア																																									1	1	
スイス																																									1		
ベルギー																																											
スペイン																																									1	1	
ポルトガル																																									1	1	
ハンガリー																																											
ブルガリア																																											
スウェーデン																																											

・文は、文科系部局、理は理科系部局、養は教養部、言は言語文化部（旧称、総合言語センター）を意味する
 ・*は名古屋大学の学園だより編集委員会（名古屋大学本部学生生活委員会）「学園だより」の記録において、西ドイツと特定しているもの

年から一九九一年までの伸び率は各々六・二倍、二・二倍というように中国の伸び率八・九倍と比べると小さい。タイ、インドネシア、フィリピン等の国々出身の留学生数はさらに伸び率が小さく、パキスタン、香港等の国々の出身の留学生数は必ずしも増えているとは限らない。

また、一九九〇年に五二二人であった名古屋大学での留学生受け入れ数が一九九一年には五一人に減っているが、この変化を留学生の出身国別にみると、中国が二二人から二一人に、タイが三五人から三二人に、ビルマが一五人から一三人、ブラジルが一三人から一人に各々減っているのがその主な要因である。

以上を要約すると、一九八〇年以降現在までの急増期における急増の第一の要因は、アジア諸国出身の留学生の増加であり、そのなかでも中国出身の留学生数が文字通り飛躍的に増加したことであるといえる。

次に、その他の主要な特徴を若干指摘することにする。

ラテンアメリカ地域についてみれば、一九七〇年から一九七七年までの期間は、ブラジルおよびアルゼンチンの二国であったが、その後、メキシコ、ペルー、ボリビア、コロンビア、ベネズエラ、コスタリカをはじめ十一か国へと出身国が広がり、留学生数も一九七七年一人（外国人留学生総数に占める割合二・二%）から一九九一年一八人（同三・五%）へと増えてきている。このなかでも増加率が大きいのはブラジル出身の留学生数である。

このような変化を部局別にみれば、理科系学部受け入れ数が文科学部受け入れ数を上回る傾向が続いている。

アフリカ地域の場合は、一九六九年から一九七七年までの期間は、アラブ連合共和国、エジプト、およびケニアの三国であったが、その後、ザイール、ガーナ、チュニジア、ギニア、タンザニア等の諸国に広がり、留学生数が一九六九年二人であったのが一九九一年に十人と増えている。

アメリカ合衆国からは、一九七〇年より留学生受け入れが始まり、一九七五年三名、一九八五年三名、一九九一

年九名を受け入れてきている。

ヨーロッパ地域についてみれば、一九七四年のドイツ、一九七五年のイギリスおよびフランス出身の留学生受け入れに始まり、その後チェコスロバキア、ルーマニア、スイス、ギリシャ、ベルギー、ポルトガル、ポーランド、スペイン、デンマーク、ハンガリー、ブルガリア、スウェーデン等というように留学生受け入れの地域的範囲が徐々に広がってきた。

一一 愛知留学生会後援会の発足および活動とその特質

1 愛知留学生会後援会に着目する理由

① 愛知留学生会後援会と名古屋大学の関わり

名古屋大学における留学生会および留学生会後援会は一九八五年に発足し、各々留学生の生活、勉学上の諸問題や悩みの解決、さらには留学生間および留学生と日本人・日本人学生との交流等の活動を行い、今日に至っている。これらの会は、名古屋大学における外国人留学生数が急増し、総数二四〇人を越えた時点に組織されたことになる。それでは、名古屋大学留学生会および留学生会後援会が組織化される以前の時期には、名古屋大学に学ぶ外国人留学生の活動とその支援活動がどのように行われてきたかといえは、それは、一九六一年に発足した

愛知国際学友会 (Aichi Foreign Students' Association, 略称 AFSA、一九六七年六月に愛知留学生会に改称) と同

後援会（一九六七年六月に愛知留学生会後援会に改称）の二〇余年におよぶ持続的な活動に依っていたことになる。

名古屋大学留学生会と同後援会の活動の具体的内容の主要なものとしては、留学生間あるいは留学生と日本人学生や市民との懇親パーティー、バザー、旅行等であるが、留学生生活のうちこのような、勉学・研究以外に住民・市民との異文化交流を目標とした取りくみの内容と発想自体は、愛知留学生会と同後援会が取りくみ、外国人留学生からも日本人職員・学生からも歓迎されたものである。

しかも、愛知留学生会の発足当初、会員の半数近くが名古屋大学に学ぶ外国人留学生であり、とくに後援会の発足と、その後の活動を持続させる上で中心的な役割を果たしてきた人物が、当時名古屋大学学生部次長として外国人留学生の厚生・指導にあたった牧島久雄氏と同大学学生部職員であった。したがって、愛知留学生会後援会は、外国人留学生が学ぶ愛知県内の大学の教職員および愛知県内の政治・経済界あるいは一般市民の有志から構成される組織ではあるが、実務の上では名古屋大学の関係職員の非常に積極的な活動によって支えられた組織であったということができる。ゆえに、この後援会の発足は、名古屋大学における外国人留学生に対する組織的な支援活動の実質的な始まりといつてよい。

②愛知留学生会後援会と全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹の関わり

愛知留学生会後援会に着目する理由はそれだけではない。同会のように、三〇数年前から県内の外国人留学生を一つの会に組織化し、支援し続けてきたという取りくみは、全国的にも珍しい例であるといわれている。次に述べるような同会と全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹との関わりからも、そのような同会の先駆性がうかがわれる。

外国人留学生受け入れの体制や諸条件の改善の方途を、留学生・日本の大学関係者・行政関係者および民間人がともに考えることを目的に、全国から一、二一〇人（七八〇国）の外国人留学生が集まり、全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹（一九九一年八月三〇日―九月一日）が開催された。すでに一言したように、外国人留学生受け入れをめぐる多大な困難を克服・解決するための、一つの有力な条件づくりとして情報交流のネットワークの全国化が、関係者の努力によってようやく着手されたことになる。このような意義ある、初めての全国フォーラムが名古屋において催すことができたのは、愛知留学生会と同後援会の三〇余年の実績がその基盤の一要素になったからであった。その意味でもこの後援会には、関係者の多大な努力が傾注されてきたことがうかがわれる。

このように外国人留学生受け入れをめぐる情報交流の全国ネットワーク化を実現する上での基盤の一要素となったとされる愛知留学生会後援会は、どのような理念・方針に基づき、どのような活動・経験を積み重ねてきたのだろうか。以上のような、情報交流の全国ネットワーク化が実現された背景を探る視点をもちつつ、ここでは、当面、愛知留学生会後援会がどのような理念・方針に基づいて発足し、活動を始めたのか、を明らかにしたい。

この愛知留学生会後援会の活動をうかがい知る同会の会報（第二号から第十号まで）は、同会事務局を担当している牧島久雄氏およびかつて一時事務局がおかれていた名古屋工業大学学生部によって保存されている。本節では、主にこの会報を分析し、この先駆的な例である外国人留学生支援活動の歴史とその特質について考察していきたい。

2 愛知留学生会後援会の発足とその特質

愛知留学生会後援会の前身である愛知国際学友会後援会は、一九六一年六月に発足していた愛知国際学友会を後援し、国際親善に寄与することを目的として、同年十月二八日に発足した。

愛知国際学友会は、愛知県の大学に学ぶ九名の外国人留学生が、「相互の融和と親睦をはかり、日本人との相互理解を深め、外国人学生の勉学活動を進めるために」（同会規約）一九六一年六月に発足した。同会発足にいたるまでの経緯は、およそ次のようであった。

一九五九年に名古屋大学は、初めて国費留学生としてタイ国から男子学生を受け入れることになったが、タイ国という日本人にはなじみの薄いと思われていた国の出身者であるとする差別意識が厚い壁となって、下宿の引き受け手を見つけることができなかった。そこで、名古屋大学の牧島久雄学生部次長をはじめ学生部職員三人の自宅に、二か月間ずつ間借りさせることになった。当時、同様の苦い体験をもたざるをえなかった名古屋大学及び名古屋工業大学の留学生九人が、前述したような目的をもって愛知国際学友会を結成することになったのである。

当初、この活動に対する支援活動は、名古屋大学や名古屋工業大学等の外国人留学生が在学する大学毎に行われていた。また、後に後援会役員の常任幹事として支援活動を担うことになる本多まつ江氏、長谷部広子氏、太田とも氏、三上孝基氏らは戦中の一九三六年頃より留学生の支援活動を続けていた。民間でも外国人留学生とくにアジア地域出身の留学生を受け入れようとする有志も少数ではあるが存在し、後援会発足の大きな力になったことは注目される。このように外国人留学生に対する個別の支援活動がすでに行われていたが、一九六一年六月二四日に名古屋大学を卒業し帰国するインド、ビルマの二人の留学生の送別会を兼ねて、名古屋市内見学およ

愛知国際学友会後援会役員 (1963年4月1日現在)

役名	氏名	所属・職名
会長	村岡 嘉六	生産性中部本部長
副会長	松坂 佐一	名古屋大学長
副会長	滝 潤次郎	名古屋商工会議所副会頭
顧問	桑原 幹根	愛知県知事
顧問	杉戸 清	名古屋市長
顧問	佐藤 知雄	名古屋工業大学長
顧問	沼沢 喜市	南山大学長
監事	三輪 等	名古屋市経済局長
監事	森川 音三郎	名古屋商工会議所
監事	柏木 千秋	名古屋大学学生部長
幹事	岩間 繁一	愛知県教育委員会教育長
幹事	大島 義暁	愛知県通商観光課長
幹事	寺井 久	愛知県秘書課長
幹事	加藤 衛	名古屋市総務局長
幹事	加藤 善三	名古屋市教育委員会教育長
幹事	永井 誠一	名古屋市秘書課長
幹事	山田 清一	国際研修館アジア協会・嘱託
常任幹事	本多まつ江	法務省保護司
常任幹事	長谷部広子	椋山女学園大学講師
常任幹事	太田 とも	生け花指導
常任幹事	山田 美代	YWCA 総幹事
常任幹事	三上 孝基	衆善会常務理事
常任幹事 (庶務)	影山 節夫	名古屋工業大学学生課長補佐
常任幹事	木村 正直	名古屋工業大学学生課学生掛長
常任幹事	牧島 久雄	名古屋大学学生部次長
常任幹事 (会計)	柴田 弥吉	名古屋大学学生部学生課長補佐
常任幹事 (庶務)	石原 国利	名古屋大学学生部学生課員
常任幹事 (会計)	鈴木 栄幸	名古屋大学学生部学生課員
常任幹事	杉浦 康英	I S A 名古屋大学学生

び日本人学生や留学生支援有志との交歓会が催されたが、このことを契機に、こうした活動を継続させさらに発展させようとして、外国人留学生を支援する後援会が結成されることになった。

発足当初の後援会員には、愛知県内の経済、政治、教育、大学や婦人団体の各界あるいは一般市民有志約七〇人が入っていた。会費は、「普通会员会費年額一口五〇〇円以上納入、学生会員 会費年額一口一〇〇円以上納入、特別会員 会費年額一万円以上」とされていた。発足当初の役員とその構成は、次のとおりであった。

事務所は、名古屋大学学生部学生課と名古屋工業大学学生部学生課に交互に置かれていた。

この役員名簿をみると愛知・名古屋の経済界、自治体の首長をはじめ総務、経済、教育の関係責任者、大学の学長や学生部長等の人物を会長、副会長、顧問、監事、幹事に迎え、これら各方面からの支援を得ることが可能となるような体制が組まれていたことがわかる。実務を担当する常任幹事は、大学の留学生受け入れの実務担当職員をはじめ、それまで愛知の外国人留学生の支援活動を行ってきた民間の団体職員や有志および I・S・A の学生から構成され、日常的に留学生と連絡をとり、相談にあたっていた。

同後援会の行う事業は、(1)外国人学生との交歓・親睦、(2)見学会・見学旅行、(3)日本人家庭への招待のお世話、(4)生活上の相談・援助、(5)その他必要と思われること、とされていた。¹¹⁾ 以上のような、愛知国際学友会および同後援会の発足にいたる経緯からみることができこれらの会の性格、および特質に関わって次の二点を指摘しておきたい。

愛知国際学友会発足当初の留学生は、タイ、インドネシア、大韓民国、台湾の諸国出身者であり、先にみたように日本人による、外国人に対する差別待遇を体験していたことから、これらアジア地域出身の留学生を支援し、対等の立場での文化交流をはかるということが、後援会の主要な関心・発想となっていたことが一つの特質である。『愛知国際学友会后援会会報 No. 2』（一九六三年）の冒頭の村岡嘉六会長の挨拶においても「・・・年々増加する東南アジア諸国よりの留学生諸君を日本に、東海地方に、愛知県にお迎えしてお互いに親しみ、日本をよく理解して頂くことは、国際親善とお互の繁栄のために非常に有意義なものと存じます。後援会の役員、会員の皆さんと共に、この目的に向かって励みたいと存じますので、何卒よろしくお願い申し上げます。（後略）」と述べているように、¹²⁾ 東南アジアを重視していることがうかがえる。

しかし、留学生たちは単に専ら支援を受けるだけの客体ではなかった。牧島氏によれば、留学生たちがまず自ら学友会を組織し生活・勉学上の困難を克服し相互の交流を行う行動を起こし、その四か月後にそれを後援するための組織が発足するという経過がたどられた。あくまで留学生自身の主体性を尊重し、その上で日本の後援者との親睦・交流を行うという方針が堅持されていたことが、後援会発足の第二の特質である。

3 愛知留学生会後援会の活動とその特質

— 発足後十二年間の歩みの概要 —

① 愛知留学生会後援会発足後十二年間の活動

前節でみたような形で発足した愛知国際留学生後援会が一九六一年度および一九六二年度に取りくんだ活動はおよそ次のとおりであった。

- ・名古屋ライオンズクラブから外国人留学生の希望する学用品（一名約五千円×七人）を贈る。
- ・一九六一年秋の名古屋まつりに外国人留学生を招待。
- ・一九六二年夏に夏山ツアー（上高地、乗鞍等）に外国人留学生を招待。
- ・後援会のメンバーやI・S・A等の日本人学生と共に鳳来寺に一泊旅行・ハイキング（春）、黒部第四発電所の設備・機械を見学する一泊旅行（秋）。
- ・一九六二年十一月、民主教育協会東海支部の会員と会食、懇談。勝沼前名古屋大学学長、松坂名古屋大学学長、清水前名古屋工業大学学長から外国人留学生が励ましを受けた。
- ・後援会の常任幹事としばしば話し合いの機会をもち、親睦・交歓を深め、さらに宿所その他留学生が困っていることの相談に後援会の常任幹事が与かる。¹³⁾

外国人留学生の、日本での不慣れな生活に関する日常的な相談を行い、励まし、学用品の援助の斡旋をする一方で、まつり等の行事や国内旅行に招待し、外国人留学生同士のも、あるいは後援会関係者との親睦・交流の機会を設けることが活動の中心になっていた。

その後、一九六三年、一九六四年となるにつれ、外国人留学生や後援会員の間の連絡・親睦が深まり、後援会の活動が次のように一層展開していった。

・ 常任委員会開催十二回。留学生を交えて親睦を深めつつ、後援会の活動を企画・実施。

・ 名古屋南ライオンズクラブ招待の日帰り奈良奥山めぐりドライブ（一九六三年十一月十七日）

名古屋南ライオンズクラブ会員とその家族十六人、留学生十四人、大学関係者四人

・ 第二回総会（一九六四年一月十七日、於名古屋市公会堂ホール）

約四〇人出席。事業会計報告承認、事業計画・予算案可決、役員改選。

・ 第一回留学生の夕（総会後に開催）

愛知国際留学生会を援助して開催。参加者四百人の盛会。愛知県立女子大学学生の仕舞、インドネシアの燭火の踊りと歌、マレーシアの国歌、タイのフォークダンスの披露。奈良、大阪、東京からきた三人の留学生も交えて約二〇人が参加者とともにダンスパーティー。

・ 名古屋東ライオンズクラブ招待の懇親会（一九六四年二月二日、於東山会館）

留学生十人と大学関係者二人が招かれ、親しく懇談、記念品を贈られた。

・ 卒業生送別会（一九六四年三月七日）

三人の卒業生（名古屋大学二人、愛知県立女子大学一人）を送るため、留学生その他関係者五〇余人が参加。名古屋市の好意による市観光バスで中日新聞社

・ 日本陶器工場を見学、平和公園等名古屋市東山地区遊覧、東別院で同寺接待の晩餐、後援会関係者から卒業祝いと送別の言

葉があり、名古屋南ライオンズクラブと後援会より記念品贈呈。互いに名残りをおしむ。

・卒業生送別会（一九六四年六月二二日、於名古屋大学職員会館）

卒業生一人（名古屋大学）を送るため、留学生十人、後援会常任幹事八人が集まり、互いに名残りをおしむ。

・新来の留学生歓迎会（一九六四年七月九日、於名古屋研修会館）

村岡会長をはじめ三一人が新来の留学生を迎えて懇談。

・美ヶ原・山中湖・伊豆天城湯ヶ島を巡る見学旅行（一九六四年九月一日―四日）

久しく留学生から要望のあった見学旅行が国際ロータリークラブ第三六〇区からの援助（十万円）と後援会会員の協力（九万円）によって実現した。参加者は、愛知・岐阜・静岡・長野の各県の大学に学ぶ二〇人の留学生と後援会・大学関係者十一人。

・碧南郡高浜町の「おまん和祭り」に後援会員の招待で参加（一九六四年十月四日）

・名古屋青年会議所との懇談会（一九六四年十一月十日）

中華料理を食べ、町の美化について青年会議所の青年経営者たちと留学生十一人・大学関係者二人が親しく懇談。

・中部善意銀行をとおして招待された日本舞踊の発表会の鑑賞（一九六四年十一月二七日、於御園座）

・名古屋南ライオンズクラブ招待の琵琶湖見物ドライブ（一九六四年十一月二三日）

名古屋南ライオンズクラブ会員とその家族二〇人、留学生十九人、大学関係者

三人¹⁴

常任委員会において後援会の企画を行いつつ、常任幹事が外国人留学生と日常的な交流をはかり、留学生と後援会員で日本国内の旅行・ドライブに出かけ、あるいは愛知・名古屋の各種団体と懇親会を催すことによって日本の社会・文化の理解の一助とし、生活、文化上の交流をもつ機会が増やされていることがわかる。

これらの活動のなかで、対等の立場に立った上での国際文化交流が具体的にどのような形で志向・努力されてきたか、という点に注目してみたい。その基本的な点は、個々の具体的な場面について検証する必要があるが、残されている資料から確かめることができるのは、個々の催しや行事のなかで、日本や日本の各地の文化を紹介するだけではなく、留学生の出身地域・国の歌、おどりや料理等の文化を相互に披露し、交流することが意識的に組み入れられている点である。その他、個々の対人関係の場面でも留学生と後援会員との間で、対等の国際文化交流が志向され、友好的な関係がつけられていたことは、次に紹介するような留学生の感想から察することができる。

その後の会報によれば、後援会の活動は概ね前記の内容が毎年展開されていった。それら個々の行事は、〈留学生間であるいは日本人との間で親睦・交流を深めることができた〉、〈容易には実現できなかった日本旅行が可能になった等日本人の後援会員にとって思い出に残るようなものであった〉旨が、後援会やその他の支援者に対する感謝の言葉とともに毎年の会報に紹介されている。それら後援会活動に対する留学生の感想のうちそれらを代表すると思われるもの二つを次にあげることにする。

「後援会の皆様には、いつも私たち留学生が大変お世話になり、言葉では言い表せない程うれしく思います。こんなにもお世話になりますのに、学生である私たちは何のお返しをすることも出来ません。

私たちは、ただ勉強して、決して御恩を忘れないようにすることだと思っています。

日本語のむつかしさはほんとうに大変であります。二年前私が日本へ初めて来た時は、ほとんど話すことも出来ませんでしたけれども、今ではこのように話すことが出来るようになったのも、日本の皆様方のお蔭だと感謝しております。

私たちは日本での勉強を終え、国に帰ったならば、私たちが現在お世話になっておりますこの温かい好意を思い出し、私たちの国へ来る留学生の為に働きたいと思えます。

そして、多くの人たちの希望を聞き、国際親善の為にまた日本との友好を活発にしてゆきたいと思えます。」
(一九六八年五月十日の一九六八年度愛知留学生会後援会総会における愛知留学生会会長(名古屋大学留学生)のあいさつ、原文日本語)¹⁵⁾

「こうして中京地区の留学生は他の地区の留学生とちがって仲良しであることを喜びとし、祖国へかえっても、国際親善の輪を広げていくことが、日本の方々後援会の方々にお報いすることだと思えます。」(一九六六年九月の南紀旅行での一留学生の声)¹⁶⁾

その他にも卒業して日本を離れていった元留学生からの近況報告や、後援会員に対する感謝の気持ちを記した通信も会報に紹介されている。

なお、後援会の総会で報告・了承された会計については、一九六六年度から会報に掲載されるようになったが、例えば一九七一年度の場合は、次のようであった。

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
前年度繰越金	一四四、五一七	見学旅行(二泊三日)	四九一、〇〇九
普通会費	四七、〇〇〇	総会・新入生歓迎会	七六、〇〇〇
特別会費	一〇、〇〇〇	「留学生の夕」援助	二五、〇〇〇
補助金	二〇、〇〇〇	卒業送別会	四、二五二〇
(名古屋市)		印刷費	三五、〇〇〇
補助金	五〇、〇〇〇	会議費	九、四〇〇
(愛知県)		会議費	九、四〇〇
旅行寄附金	三〇一、〇〇〇	通信・交通費	四、〇一〇
旅行参加費	一六二、五〇〇	翌年度繰越金	七一、二七八
総会新入生歓迎会費	一二、〇〇〇		
卒業送別会費	七、二〇〇		
計	七五四、二二七	計	七五四、二二七

当時の会費は、普通会費年額一口千円以上、学生会費は年額百円以上、機関加入の特別会費は年額一万円以上とされていたので、普通会費四七口、特別会費一口があったことになる。支出では、金額からみて見学旅行、総会・新入生歓迎会(同日に行う)、「留学生の夕」援助、卒業送別会が大きな行事となっている。

以上に紹介してきたように、愛知留学生会後援会の活動が留学生から非常に歓迎され、留学生に対する物質的・精神的な援助の上でも、また対等の立場での国際交流を志向する上でも非常に有意義な取りくみを行ってきたといえよう。

②愛知留学生会と愛知留学生会後援会の関係―愛知留学生会の主体性―

愛知留学生会後援会による後援活動のなかで、対等の立場での国際文化交流がどのような形で行われていたか、という本稿の基本的な視点から最も注目されることは、留学生および愛知留学生会の主体性を尊重するという方針である。それでは、後援会からの支援を受けながらも主体性をもって活動を展開していた愛知留学生会の活動はどのような様子であったのだろうか。それは、後援会会報の第六号（一九六八年七月）から掲載されるようになった「留学生会より」をとおしてみることができる。そこでは、総会の報告、役員改選結果や予定されている行事が紹介されている。留学生会の希望する行事として山登り、スポーツ大会、演劇鑑賞（文楽、歌舞伎）、記念植樹等があげられた上で、「これら沢山の希望の全部を実行するのは、なかなか大変なことかもしれませんが、一つでも多く実行すべく、また少しでも多くの人の希望を取り入れて、やっていきたいと思えます。昨年の都ホテルでの第五回「留学生の夕」の行事を成功させるために払った皆の努力により、会をもちたてていくのは留学生一人一人の責任であり、協力によってお互いが励まされ、力強く楽しく生活できることが体験によって理解できたので、最近は会も非常に活発になってまいりました。大いに楽しい、意義ある活動をつづけていきたいと思えます。」と会長が所信を述べていること¹⁸から、留学生会が主体性をもって活動できるよう努力していることがうかがえる。実際に、「留学生の夕」では、愛知留学生会が日頃支援を受けている後援会員や愛知・名古屋の支

援者に対する感謝の気持ちを表すために、自分たちの誇りとする祖国の歌、踊りや料理を披露する機会としても位置づけられている。¹⁹ また、一九六八年一月二八日には、「留学生の夕」の反省会を行うとともに、留学生会からの招待によって、すき焼き料理を食べながら留学生と後援会員との交歓親睦会が六〇名近い出席者によって催されている（於、名古屋大学医学部共済団）。²⁰

先に触れた全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋²¹では、同フォーラムに参加した留学生一同の名前で「『留学生・名古屋アピール』宣言」が発表され、留学生受け入れをめぐる諸問題解決にむけた要求がとりあげられたが、それだけでなく、その諸問題解決にむけた留学生自身の課題ももりこまれていた。飯島宗一同フォーラム実行委員長は、この留学生自身の手によるアピールについて、愛知留学生会の活動から展開した「留学生諸君の自発的意志の結集の成果であり、そこには愛知留学生会の長年の実績がひとつの有力な要素をなしたということができましよう」と説明している。²¹

③ 愛知留学生会後援会による留学生支援活動のネットワーク化の理念

これまでにみてきた愛知留学生会後援会の活動のなかには後援会経費ではまかなわれない活動も存在した。それは、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、名古屋青年会議所、中部善意銀行等の民間の団体・有志による招待行事等である。こうした外国人留学生との交流を希望する団体・有志と、外国人留学生とを結びつけることも後援会の大きな任務としてとりくまれてきた。これらは、いわば支援活動のネットワーク化の活動であるといえる。牧島氏は、このような活動について「その交流をうまく斡旋するためには、留学生がいったいどんな生活をしているのか、どの国からどういう気持ちで日本に来ているのか、その国の文化はどのようなのか、その国が

ら来た留学生はこういう習慣を持っており、またこういう経済的に苦しい点があります・・・こういうことを十分説明して、そして対等な気持ちで留学生と交流する、あるいは、場合によつては支援をする。こういう対等なおつき合いをするような、基本的な留学生に対する理解、交流のあり方といったものを、できるだけ私ども（愛知留学生会後援会―引用者）が自分たちの体験をとおして―教えて差し上げると言つては悪いのですけど―まだ十分ご理解のない方にはそれを教えて差し上げる。それによつて、留学生も安心してその新しい団体との交流、あるいは新しい個人との交流というものが進められるわけでございます。」と説明している。²²² ここには、後援会員以外の、有志の地域住民・地域団体と留学生との交流の斡旋についても、あくまで対等の立場での国際交流が行われるような条件をつくることを原則としていふこと、そしてそのためには留学生の出身地域・国の文化や留学生生活の状況等の留学生のおかれた境遇・状況が日本の地域住民に十分に認識されることを重視していることが端的に示されている。

こうした外国人留学生との国際交流・支援活動における基本的な原則について、牧島氏は次のように解説している。

「・・・後援会というのは、先ほども申しましたように、そんなに強大な組織ではありません。しかし、この地方の多くの団体・個人は善意を持っており、なんとか近づきたい、交流したいという気持ちがあります。それをうまく結びつけることが非常に大事ではないか。そしてその積み重ねにより、今日の名古屋のフォーラム（全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹、一九九一年八月―九月―引用者）の実現にこぎつけることができたわけでございます。その基本的な精神としては、お互いに―日本人同士だけじゃなくて、世界のすべての人々に対して―人間としてのあり方を基本的にしっかりと理解をする。そして、それを自分の生活に結びつけ

て、人との接し方を十分心得ていく。そして、そのひとつひとつの結びつき・交流をグローバルな視野に立って広めていく。こういう人間観と世界観・・・このふたつのもを、そうした交流・支援の一番基本にすえておかなければならないのではないかと、こんなふうに思います。¹²³

このような、留学生との国際交流と支援に関する、生活と結びついた、しかも対等の関係に立った人間関係を重視するという理念を基礎にして、後援会は留学生との国際交流と支援のためのネットワークを広げてきたのである。

まとめ

以上の考察を総括して整理すると、名古屋大学における外国人留学生受け入れ数の推移と留学生後援活動の歴史的特質として以下の三点を指摘することができる。

第一に、外国人留学生受け入れ数の変化については、全国的な動向と同様に一九五〇年代末から少しずつ増え始め、一九八〇年頃から飛躍的に急増した。急増したのは、第一に、学部受け入れ数よりも大学院受け入れ数が急増したからであり、また第二に、留学生の出身国・地域別にみると、アジア地域とくに中国からの留学生受け入れ数が文字通り飛躍的に急増したからであった。この第二の点は、全国的動向と共通し、第一の点は全国的動向と逆の動きである。また、名古屋大学が受け入れてきた外国人留学生は、一九五〇年代末以降現在までアジア地域出身者が一貫して圧倒的に多いが、さらにその内訳をみると一九五〇年代末から一九七九年頃までのいわば漸次増加倍期には大韓民国、台湾、インドネシア、タイ等の国々で占められていた。しかし、一九八〇年頃か

ら現在までの急増期には中国出身の留学生が急増し、中国出身の留学生数は一九九一年時で留学生総数の四一・九%と突出するようになる。とはいえ、大韓民国、台湾、タイ等の国々から、あるいはブラジル等のラテンアメリカの国々からの留学生も漸次増えてはいる。したがって、名古屋大学は、この点で外国人留学生の研究・教育をとおしてアジア、ラテンアメリカ地域と深い関係を結んできたということが出来る。

第二に、愛知・名古屋の大学における外国人留学生に対する組織的な支援活動は、大学の教職員、県や市の行政関係者、産業界そして地域の住民有志が中心となって、一九六〇年代初めから行われてきたが、その支援活動においては、アジア地域等の発展途上地域出身者を冷遇することなく、対等の立場でお互いの文化・慣習を尊重しながら支援するという考え方が当初からもたれていた点である。一九五〇年代末から一九六〇年代はじめに受け入れた留学生がアジア地域出身者であり、その後も同地域出身者が多いという現実があったが、このような現実を前にして、留学生の出身地域・国の文化および日本の各地の文化を相互に披露・紹介し、交流する等の形を通じて対等の立場に立った国際文化交流を志向する努力が始まったのである。十九世紀末頃以来、アジア地域等特定の地域出身者に対する差別意識は日本社会に根強く続き、外国人や外国人留学生の生活・研究・教育の諸条件を改善し、また対等の立場に立った真の国際交流をすすめることを阻む要因になっていることを考えると、愛知留学生会後援会の持続的な活動はきわめて先駆的かつ貴重な取りくみであるといえる。

第三には、愛知留学生会後援会が愛知留学生会を支援するさい、あくまで愛知留学生会や外国人留学生の自主的、自立的な活動を重視し、それを側面から援助するという基本的方針を堅持してきた点である。これは、第二の特質として指摘した、対等の立場での国際交流を行うという基本的理念の一つの現れである。

外国人留学生受け入れをめぐる諸問題を解決するための、情報交流の全国ネットワーク化が実現された背景に

は、以上の第二および第三の点に共通する、愛知留学生会後援会による対等の立場での国際文化交流への志向・努力が存在していた。

なお、本稿では十分に考察できずに残された課題も少なくない。最後に、その主要なものをあげて今後の課題としたい。

第一に、一九六八年以前に名古屋大学で受け入れてきた外国人留学生の在籍部局と出身国およびその人数等に関する資料を確定することがあげられる。さらには、名古屋大学医療技術短期大学部、旧制名古屋大学、名古屋帝国大学、さらにはその前史における外国人留学生の受け入れの歴史をもあわせて考察することが、名古屋大学の国際交流史の歴史的な特徴を明らかにすることにつながると思われる。

第二に、外国人留学生の出身国の留学生派遣の方針や、その背景となる文化的、経済的、政治的な事情、と名古屋大学あるいは日本の大学・大学院での外国人留学生受け入れの変化との関連を考察し、外国人留学生受け入れの歴史をより深くとらえていくことが必要である。

第三に、本稿では愛知留学生会の発足と、その後十二年間の歩みを概要に限り考察したが、その後から今日までの活動史について、また発足にいたる以前の時期に行われた有志による個別的な交流と支援の歴史を明らかにすることが残されている。そのさい、留学生会および留学生会後援会の長年の懸案であった留学生会館（宿舎）の建設の実現までの道のり、および一九九一年に開催された全国留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹が組織されるまでのネットワークの展開の歴史を分析の中心的な視点とすることが必要である。

注

- (1) 文部省『学校基本調査報告書』(一九九一年度)。
- (2) 名古屋大学学園だより編集委員会(名古屋大学本部学生生活委員会)『学園だより』第八六号・一九九一年六月一日、八―九頁。
- (3) ・国際交流研究所『外国人留学生一五〇九人(就学生、研修生を含む)の意識調査(留学生の目に映った「日本」と「日本人」)』(一九九二年五月)。
次の文献からもほぼ同様のことがうかがえる。
 - ・総務庁行政管理局編『留学生受け入れ対策の現状と問題点』(大蔵省印刷局、一九八八年九月)の「留学生アンケート調査結果」、六二―一二九頁。
 - ・名古屋大学留学生専門委員会『外国人留学生受け入れの基本問題に関する調査研究』一九八八年二月。
 - ・財団法人国際留学生会館『留学生の生活に関するアンケート(調査結果)』一九九二年三月。
- (4) 牧島久雄「国際文化の交流―留学生問題にふれて―」『中日新聞』夕刊、一九九〇年四月二六日。
- (5) 名古屋大学史編集委員会『名古屋大学五十年史』部局史編一、一二七―一三二頁の記述を基にその後の動きを加えて記述した。
- (6) 前掲、国際交流研究所『外国人留学生一五〇九人(就学生、研修生を含む)の意識調査』四頁、五頁、十頁。
- (7) 全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹での飯島宗一実行委員長の挨拶。全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹実行委員会『日本の国際化と留学生(全日本留学生ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹報告書)』一九九二年三月、七頁。なお、飯島宗一実行委員長の同前挨拶ではもう一つの要素として名古屋国際センターおよびそれを拠点としてネットワーク化され、国際交流の活動を行っている市民グループの力をあげている。
- (8) ・前掲、牧島久雄「国際文化の交流―留学生問題にふれて―」。
・牧島久雄「愛知県における留学生の生活と援助体制」、名古屋大学教育学部『留学生教育に関する調査研究』一九八八年

三月。

- ・『中日新聞』朝刊連載の「若草もえて 名大創立五十年 第二部歴史二四 国際交流」一九八九年十一月三日。
- (9) ・愛知国際学友会後援会 『愛知国際学友会後援会会報』No.2、一九六三年、六頁。
・愛知留学生会後援会 『愛知留学生会後援会報』No.7、一九六九年十月、十七頁。
- (10) 本文の愛知国際学友会後援会に関する以上の記述は前掲『愛知国際学友会後援会会報』No.2、一九六三年に拠る。
- (11) 同前会報、一四頁。
- (12) 前掲『愛知国際学友会後援会会報』No.2、一九六三年、一頁。
- (13) 同前会報、七頁。
- (14) 『愛知国際学友会後援会報』No.3、一九六四年十二月、二六―二八頁。
- (15) 『愛知留学生会後援会報』No.6、一九六八年七月、一一頁。
- (16) 『愛知留学生会後援会報』No.9、一九七二年三月、二五頁。
- (17) 『愛知留学生会後援会報』No.10、一九七三年三月、二五頁。
- (18) 『愛知留学生会後援会報』No.6、一九六八年七月、二七―二八頁。
- (19) 全日本留学生会ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹の第四分科会「地域住民と留学生との望ましい関係づくり」での牧島久雄氏の発言。全日本留学生会ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹実行委員会、前掲『日本の国際化と留学生』二二―二一頁。
- (20) 『愛知留学生会後援会報』No.6、一九六八年七月、三二頁。
- (21) 全日本留学生会ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹での飯島宗一実行委員長の同前挨拶。全日本留学生会ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹実行委員会、前掲書、七頁。
- (22) 牧島久雄氏の同前発言、全日本留学生会ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹実行委員会、前掲書、二一〇頁―二二―二一頁。
- (23) 牧島久雄氏の同前発言、全日本留学生会ネットワーク・フォーラム名古屋⁹¹実行委員会、前掲書、二二―二一頁。

本稿を執筆するにあたり、牧島久雄氏（愛知留学生会後援会事務局、財団法人国際留学生会館学生相談員）、名古屋工業大学学生課および名古屋大学の各学部教務学生掛および庶務部国際交流課留学生掛に資料提供等お世話になった。記して感謝申し上げたい。

（かたおか ひろかつ 名古屋大学史編集室）